

昭和十六年十二月八日宣戰の詔を承給はりて
皇軍のいち速く立てし偉勳を稱へて詠める歌

國學院大學教授 佐 伯 有 義

山往かば草むすかばね

海往かば水漬屍と

言立つる益良武夫は

明津神我が大君の

亞米利加の又英吉利の

あちきなき悪行をば

いきどほり赫怒まし

戦を宣らせたまへる

大詔もちかしこみて

吹きすさぶ嵐の中に

怒り狂ふ波押分けて

荒潮の潮の八しほ路

押渡り伊往渡りて

東の布哇の島の

島陰に籠る敵をば

誅罰め打懲さむと

踏健び男健びしつゝ

やまなせる鐵の艦

底深く海の藻屑と

束の間に顧眄之間に

撃沈め沈めてしより

茜刺日をも隔てず

西南マレーイの海を

守らひし皇軍艦は

空翔ける我が荒鷲は

海原を鳴り轟かし

大空をなり動して

敵の艦此にても多く

撃沈め沈め果てけり

更にまた南の洋の

百八十の島の悉

千萬の皇軍人は

大船に烟蹴たてゝ

海原を遠く渡りて

村肝の心凝らして

二重三重取廻らして

磐ほなす堅く造れる

幾千の砦に隠れ

數多き城のへに籠る

醜の敵有のことく

打罰め滅ぼさむとて

叢がれる弾の中をば

投擲てる手弾の下を

武士は身も棚知らず

ひたおしに推進めば

夏草の照る日に凋み

秋草の野分に靡き

靡くごと靡き伏しつゝ

凋むごと凋み枯れつゝ

皇軍の向へるところ

日の御旗高く耀き

國人は御稜威畏み

悦びて服従ひ奉り

そが業に勤しみにけり

大詔賜はりし日ゆ

二月にいまだ満たねど

百年の長き年月

己れのみ賢しと思ひ

人皆をあさみ嘲り

ほこりてし醜の虜をば

斯く狀に誅罰めたる

日の本の我が武士の

此處に立て彼處に立てし

功こそ高くなふとく

後の世に語り傳へて

萬代の鏡とすべき

功なりけれ。(一月三十一日)